

## 発達障害児へのレクリエーション場面での支援について

渡辺久美子・山崎晃史  
(社会福祉法人 昴 ハロークリニック)

### [問題と目的]

発達障害の領域では、早期発見・早期対応が重要だと言われている。しかし、実際に支援を行っていく過程では、この点に重点を置くことによる弊害もある。早期に障害を明確化しようとする・焦って対応しようとすることで、子どもと家族との関係、家族と関係者との関係がかえって困難になる場合も多い。早期からの支援によって、根本的に本人が持っている障害や特性自体を『治す』ことは難しく、本人のペースでの成長を支える・2次的な問題を防ぐということが、早期発見・早期対応の主な目的となっている。これらのことを目標として考えると、早期に重点をおいた関わりというよりも、継続して関わる中で成長や変化に合わせた支援を行っていくことが必要だと考えられる。このような継続した支援の取り組みは検討されているものの、「早期発見・早期対応」という考え方の社会への広がりには比較すると、十分ではないと考えられる。

本研究では、ADHD や AS と診断されている、もしくはその傾向がある児童を対象としたレクリエーションでの実践報告を行い、「本人と周囲の人が安定した関係性を築く」という視点を持ちながら継続した支援を行っていくことの有効性について検討する。今回は、音への感覚過敏を持った子どもの変化に絞って報告を行う。

### [実践報告]

#### ●レクリエーションの目的

ADHD、AS などの特徴を持つ小学生を中心に、同年代と関わる経験を行う。日常とは違った関係性を経験すること、自分らしさを表現できる場面を持つこと、主体的に遊びを楽しむ経験をすること…などを通じて、子どもの成長を支えていく・ステップアップのきっかけを作ることを目的とする。

#### ●レクリエーションの構造

月1回の土曜日、午前～午後にかけての活動。基本的に親子参加で、5～10 家族。クリニックに受診、相談を行った人の中から、必要性がある人を対象に、スタッフが参加をすすめる。レクリエーションのスタッフは、クリニックの心理士が行っている。

#### ●事例

- ① 特定の音への不安でレストランに入れない子ども（小2）の事例
- ② 雷への不安が強い子ども（小3）の事例
- ③ さまざまな音への過敏が強い子ども（中3）の事例

### [考察]

子どもが成長していく過程では、自分らしさを認められながら仲間関係を形成していくこと、その中で、苦手さに向き合っていくことが重要だと考えられる。発達障害の領域では、早期発見・早期対応と並んで、トレーニングが強調されることが多いが、周囲と良好な関係を築き、活動の幅を広げていく中で、自然な形で苦手さに向き合うことができる場合も多くみられる。感覚過敏には強い不安が伴い、その予期不安が過敏さをさらに増強してしまうというパターンがあり、安心感を持てるように働きかけることによって、過敏さが軽減する場合は多いと考えられる。

今回は、感覚過敏に絞った報告を行ったが、その他の様々な困難さ、成長に伴って現れる新たな課題への対応も必要とされる。困難さは短期間で解決されるものではなく、また、早い時期に発見したからといって、その後の困難さがすべて回避できるわけではない。どのような場においても、困難さに向き合い、問題に対処していくためには、「本人と周囲の人が安定した関係性を築く」という視点を持ち、継続した支援を行っていく必要があると考えられる。

発達障害の特徴を持つ子どもは、日常生活で生じる問題から、学校での集団生活・友人関係で躓きを抱える場合も多い。日常的な人間関係から離れた場で、いつもとは違った関係のパターン・集団への参加の仕方・集団の中での自分の位置を体験しておくことの意義も大きいと考えている。